

葉集を読む

松岡 隆子

渋滞を抜けたる虹のハイウエイ

三宅まどか

高速道路は一旦渋滞に巻き込まれると悲惨だ。ゴールデンウィークや盆暮の帰省ラッシュではどの高速道路も延々と渋滞が続く。事故渋滞も厄介だ。いつまでも続く渋滞にいらいらしながらも渋滞が解消されるのを待つばかりではない。どんなに長い渋滞もいつかは解消される。渋滞を抜けて一気に加速する爽快感は最高だろう。ましてや前方には虹がかかっている。虹へ向かって走る。映画のワンシーンのようだ。

草の花風生庵の道の辺に

加々美敦子

「俳句の館風生庵」は山中湖畔の文学の森公園の中にある。風生庵には直筆の色紙や短冊、軸、愛用品の他、交流のあった高浜虚子、水原秋櫻子、山口青邨、武者小路実篤、川端康成らの貴重な筆跡が展示されている。また居間の一部は、東京池袋の自宅の書齋がそのまま再現されている。

眸先生が風生庵を訪ねられたのは平成十六年の早春だった。(縁側はまだ冷たくて小草の芽)という句を詠まれている。富士吉田市在住の加々美さんにとって風生庵は親しみのある吟行地で、何かにつけ訪れては句を詠まれているようだ。路傍に咲いている草の花は風生の第一句集『草の花』に繋が、風生の草木愛の世界を象徴していると言えよう。

門前を夜も横切り蟻の道

田辺 文枝

蟻は蜜蜂と同様に立派な社会生活を営んでいるといわれる。女王蟻と雄蟻は朽木や地中の巣の中に潜んで現れず、地上で見かけるのは働き蟻である。働き蟻は夜も働き続けるという。長々と続く蟻の列は日中はよく見かけるが、夜見ることとはあまりない。掲句の場合門灯の明りで見えたのだろう。薄闇に泛ぶ黒い蟻の道に気付いた驚きを淡々と詠んでいる。それにしても夜も働く蟻とは何とも健気である。

送り火や蹤いて来るなと姑の声

森田 道子

〈蹤いて来るな〉という姑の声を聞いたのは作者自身だとばかり思っていたが、そうではないらしい。漏れ聞いたところによるとご夫君が「お前はまだ来んでもいいと言ったぞ」と言われたのだそうだ。世にいう嫁姑の確執など微塵もなく心穏やかに暮らしてこられたお二人の佳き関係が思われ、ほのぼのと心が温まる。(姑の声)は森田さん自身にも聞こえたに違いない。

水無月の一夜の祈りひたすらに 阿久津早智子

同時作に（病室に別れ近づく大夕焼）がある。病室を染めていた夕焼けも消えて深々と夜が更けていくなか、今にも消え入りそうな命をひたすら見つめる。神に召されてゆく掛け替えのない命に別れを告げなければならぬのは余りにも切ない。敬虔なクリスチャンの作者にとつてその夜の祈りは特に深い思いがあつたことだろう。季語の（水無月）が静かな祈りを包み込んでいる。

励ましの言葉つぎつぎ七月来 芝 京子

芝さんは今リハビリ病院に入院されている。ご主人様やお子さん達からは「大丈夫？ リハビリ辛くない？」と毎日のようにメールが届く。「リハビリ頑張つてー!!」とお孫さん達もエールを送る。俳句の友達や知人からも次々と便りが届く。温かい励ましの言葉に包まれて七月の暑さも乗り越えられたに違いない。リハビリの日々を俳句に詠むことで自らを励ましながら頑張っていたきたい。ご快癒をお祈りするとともに、毎月のご投句をお待ちしている。

敗戦日砂場に残る空馬穴 伊藤 生子

日暮れの砂場に置き忘れられた空のバケツ、それは敗戦の日の虚無感を物語っているようだ。身をもって敗戦を体験した人達には、砂場は一瞬無彩色になり、カラフルなポリバケ

ツはあのブリキの馬穴に変わる。敗戦色が日増しに濃くなる中でのバケツリレーでの防火訓練など、いま思えば虚しさが募るばかりだろう。

掲句の作者は未だ三十代になったばかりである。若い作者が自分の言葉で敗戦日を詠んでいることに注目した。戦争体験者の声は次の世代に確りと引き継がれている。小さなポリバケツは決して戦火に晒してはならない。八月十五日はいつの世になつても決して忘れてはならない日なのである。

その他の印象句

幼の手離れ流灯たゆたへり 小泉 恵子
そばにある小さき幸せ赤まんま 梅澤 惇子
森ちゆうに雨降ることく蟬の鳴く 高橋いはを
踊太鼓窓に届けば踊りけり 堀 すみ江
一言にこころ壊れて秋の風 山下なつ子
漫画に埋もれて夏休み課題図書 西島 美晴
父に添ひ母も来たまふ魂迎 高松 房子
とんぼうに湖水いよいよ深みどり 小川テル子
川風に二人で座せばつくつくし 朱 桂子
つまらなき夜は守宮さへいとほしき 野原 洋子
卓の上に白桃のある誕生日 菅原 珠子
子に合はす暮し鉄砲百合咲いて 鈴木美代子